

RIPPLE V

RIPPLE V & 3DAP Japan LLC

提供

RIPPLE V 配給

ペパーミントソーダ

4K 修復版

DIABOLO MENTHE

監督・脚本

ディアーヌ・キュリス

1977 ルイ・デリュック賞受賞

1979 ナショナル・ボード・オブ・レビュー 外国語映画賞受賞

1977 年/フランス映画/カラー/上映時間 101 分
ビスタサイズ(ヨーロッパビスタ) 1.66:1/MONO

Une coproduction LES FILMS DE L'ALMA - ALEXANDRE FILMS
© 1977 - TF1 DROITS AUDIOVISUELS - ALEXANDRE FILMS-TF1 STUDIO

RIPPLE V

解説

フランス映画界において女性監督の先駆者として称えられているディアヌ・キュリス監督が自身の少女時代の体験を基に映画作りの経験が全くないなかで作り上げた『ペパーミントソーダ』は、鮮烈な輝きを放ちながらフランス映画界に登場し、1977年のルイ・デリュック賞を受賞した。フランソワ・トリュフォー監督の『大人は判ってくれない』の少女版とも評され、今なお青春映画の金字塔とされる伝説のフランス映画が47年の時を経て日本初公開される。

近年、本作品が新たに注目を浴びたきっかけは、2018年、製作40周年記念としてコーエン・フィルム・コレクションが行ったデジタル修復版が、フランス、アメリカで再公開されたことであった。

米批評サイト Rotten Tomatoes の批評家たちが投票する TOMATOMETER で91%、一般ファンが投票する AUDIENCE SCORE で78%が付与されたのに加え、著名な映画データベース IMDb RATING で7.0ポイントを得るなど高い評価を獲得している。

更に、『グランド・ブタベスト・ホテル・ブタベスト』のウェス・アンダーソン監督は2021年、自身の監督作品『フレンチ・ディスパッチ ザ・リバティ、カンザス・イヴニング・サン別冊』の公開を記念してアリアンス・フランセーズ財団と協力して行った特集上映「ウェス・アンダーソンのフレンチ・コネクション」で、お気に入りのフランス映画7作品のトップバッターとして『ペパーミントソーダ』をオープニング作品に選定している。

物語は1963年のパリを舞台に、両親が離婚して母親と暮らす十代の姉妹の一年間を追ったもので、1960年代のフランスのリセの学生たちの友情やいざこざ、教師たちの醜悪な実態、親たちの苦悩や愛情といった日常風景がコミカルで瑞々しいタッチで描かれる。タイトルは、妹がカフェで飲む大人向けの炭酸飲料「ペパーミントソーダ」を指している。姉妹が通う高校はパリ9区に実在するリセ・ジュール・フェリー校。キュリス監督が自分の妹に向けて送ったメッセージと思われる、「まだオレンジ色のセーターを返してくれない姉へ」という字幕から本映画が始まるのもご愛嬌。

キュリス監督は自らが脚本を書き製作者として資金調達も行った。最初は門前払いだったゴーモン社の担当者が、彼女の熱意としつこさに負けて、「多分、彼

RIPPLE V

女は狂っている。」と言いながらゴーサインを出したという逸話は今でも語りつがれている。彼女と共に脚本を担当したのは、後に『つつましき詐欺師』(劇場未)で1996年カンヌ映画祭脚本賞を受賞したアラン・ル・アンリ。撮影は1992年の『リバー・ランズ・スルー・イット』でアカデミー撮影賞を受賞したフィリップ・ルースロ。1987年の『戦場の小さな天使たち』と1990年の『ヘンリー&ジューン/私が愛した男と女』で2度オスカーにノミネートされている。近年では『ファンタスティック・ビースト』シリーズも担当している。音楽は来日公演も行ったことがある人気歌手兼作家のイヴ・シモン。尚、フランス版ポスターを手掛けたのは、漫画家、イラストレーターとして知られるFloc'hによるもの。後にウディ・アレン作品などを手掛ける彼にとって、初の映画ポスターデザインである。2015年にはルイ・ヴィトンのトラベルブック エディンバラを発表し話題となった。

主人公であるアンヌ(妹)役のエレオノール・クラウワインは本作品が映画デビュー作。その後アニー・ジラルド主演「Vas-y maman」(78・未)「La clé sur la porte」(78・未)やナタリー・ドロネ主演「Le temps des vacances」(79・未)に出演するなどフランスを代表するスターとの共演を果たす。フレデリック(姉)役のオディール・ミシェルはブノワ・ジャコ監督イザベル・ユペール主演「Les ailes de la colombe」(81・未)に出演。「Vénus」(84・未)では主演を務めた。2008年にはオリヴィエ・アサイヤス監督の『夏時間の庭』に出演している。母親役にはアヌーク・フェルジャック。1940年代から活躍した実力派として知られ、数多くの作品に出演した。ジョルジュ・ロートネル監督『牝猫と現金(げんなま)』(68)アラン・レネ監督『ジュ・テーム、ジュ・テーム』(68)などがある

『ペパーミントソーダ』のフランスでの公開は1977年。300万人を動員し大ヒットを記録した。同年のルイ・デュック賞受賞に加えて1979年には全米ナショナル・ボード・オブ・レビュー賞の外国語映画賞に輝いている。原題はペパーミントソーダのフランス語 Diabolo Menthe (ディアボロ・マント)

###

RIPPLE V

ストーリー

1963年、夏休みの終わり、アンヌ（エレオノール・クラフワイン）は姉のフレデリック（オディール・ミシェル）とボーイフレンドがビーチでいちゃついているのを横目に、一人海辺を去る。クリフ・リチャードの「リビング・ドール」がラジオから流れている。夏休み最終日、姉妹は駅で父親に見送られる。

新学期初日、母親（アヌーク・フェルジャック）は彼女たちを学校へと送り出す。どうやらアンヌはクラス分けを心配している模様。二人は厳格な女子校リセ・ジュール・フェリー校に通っているのだ。

ある日アンヌは姉とボーイフレンドのマルクの間で交わされた手紙を盗み見する。知ってか知らぬか姉はマルクからの手紙を親友のミュリエルに預かってもらうことにした。早速アンヌはクラスメートにはマルクが自分のボーイフレンドだと嘘をつく。最近友人たちはセックスについて興味津々で、とんでもない知識不足ながらも真面目に語り合うのだった。

アンヌは授業もどこかうわの空でとにかく成績が悪く、美術の授業で描いた絵が下手だと先生にからかわれる始末。この頃のアンヌは生理が来るのを待ち遠しく思っている。それは女性としての成熟を意味するからだ。そのため、実際には生理が始まっていないのに、生理痛があるふりをして授業をさぼる。テストの課題は姉の答案を丸写しして提出するも、あっさりばれて0点に。それでもアンヌは小遣いが安いことや学校のみんなが履いているストッキングを母親が買ってくれないことに腹を立て、さらには集団でカンニングしたり自信のない教師への冷酷な仕打ちをしたりととにかく問題ごとばかりを引き起こし、ついに教頭を決定的に怒らせる。

むしゃくしゃしているアンヌにも行動に出る時がやってきた。母親のストッキングをこっそり履いて、学校に呼び出しを受けていた友人とカフェに繰り出したのだ。しかし、そこで姉に遭遇し、今度は姉にカフェを追い出されてしまう。そして、とうとう母親にこのままでは寄宿学校送りと言われることになる。

冬休み前、アンヌの元に久しぶりに父親が訪ねてきた。姉妹で食事に出かけ、三人でスキーに行く約束をした。父との関係はぎこちないが、とにかくアンヌは母親のボーイフレンドが嫌いなのだ。

RIPPLE V

冬休みが明けると姉と一緒に映画館で「大脱走」を見に行く。それは、大人が見る映画なのだ。そしてアンヌにとっては待望の初潮がやってきた。妹を子供扱いする姉は一人でダンスパーティーへと行きたがるが、姉妹で行くのが条件と母に言われ、二人で行くことに。どうやら最近成績が下がってきていることも原因らしい。姉は妹と違って成績も優秀で優等生のはずだが、ここにきて変化が訪れているのだった。姉のクラスでは、パスカルという女の子が、極右過激派のテロに対する平和的な抗議デモが警察によって、強制的に解散させられ死者がでたという、恐ろしい話をした。

今までの彼女にとって仲の良い友人といえば上流階級育ちのペリーヌとマルクからの手紙を預かってくれたミュリエルだが、フレデリックの交友関係も新たな局面を迎える。ある日ミュリエルが家出したのだ。マルクとのキャンプをやったのことで母から許しをもらい、二人で出かけていたが、何やら二人の雲行きが怪しくなっていたそんな矢先の出来事だった。

そんななか、フレデリックは校門の前に反共産主義、反ユダヤ主義者が押しかける騒ぎを目撃する。ユダヤの血が流れているフレデリックにとってそれは衝撃的な事件であった。彼女の興味の対象は、政治的なものに移っていく。母親からは政治に関わるなと釘を刺されるが、遂には謹慎処分を受けることに。

春も近いある日、母と娘たちは洋服を買いに行くが、帰り道アンヌは何の気なしに理髪店の軒先で商品を万引きしてしまう。激怒する母と泣きじゃくるアンヌ。フレデリックはアンヌを「ママを心配させないで」と優しく諭すのだった。

ついにフレデリックは学校に戻りミュリエルと再会する。彼女は今までボーイフレンドと農場で暮らしていたことを明かし、校庭で学校への抗議を大声で叫ぶとともに退学する。

学校では演劇祭の準備が始まった。今年の出し物はモリエールの「女学者」。主演のヴァジウスをパスカルが演じ、えせ学者ツリソッタンをフレデリックが演じることに。二人の距離は縮んでいく。数ヶ月前まで仲良くなかったのに、友人関係が変わるのは不思議とパスカルは言う。

演劇発表会の日、観客席には、母親とボーイフレンドとアンヌが座っていた。「女学者」は大成功。父親も一人でやってきていたが、舞台裏でフレデリック

RIPPLE V

を祝福する一群に混じることにはなかった。

そしてまた夏休みがやってきた。姉妹は母親に見送られ、海辺の父親の元へと列車に乗る。

###

RIPPLE V

バイオグラフィー

ディアーヌ・キュリス：監督・脚本

ディアーヌ・キュリスは、1948年12月3日にフランスのリヨンで生まれた。ロシアとポーランドのユダヤ人移民の両親は1942年にフランスの強制収容所で出会い結婚。1954年に両親が離婚した後、若きディアーヌは母親と姉とともにパリに移り住む。キュリスの父親はリヨンに残って紳士服店を経営し、母親はパリでブティックを経営した。母親が家を出る決心をしたのは、他の女性との強い絆によるもので、その絆はその後も続いた。ディアーヌは別居を恨み、16歳の時に父親のもとへ家出することもあった。リセ・ジュール・フェリー校でしばらく学んだ後、彼女と生涯の伴侶であるアレクサンドル・アルカディと出会いイスラエルのキブツ（集団農業共同体）で暮らす。彼らは1967年の六日戦争の間もそこに留まり、フランスに帰国後ソルボンヌ大学に入学した。しかし1968年5月の学生運動に巻き込まれ大学を中退し、ディアーヌは俳優として、アレクサンドルは俳優兼監督として、二人とも演劇の道へと進む。

1970年代に彼女は舞台女優になり、最初はルノー・バロー劇団で、その後カフエ・ド・ラ・ガールで活躍。この10年間、彼女は映画にも数本出演し、フェデリコ・フェリーニの『カサノバ』（1976年）で小さな役を演じたほか、『Les brigades du Tigre』（1975年）や『Commissaire Moulin』（1977）などテレビ映画やテレビシリーズにも出演した。ディアーヌ・キュリスの真のキャリアは、1970年代半ば、フィリップ・アドリアンと組んで演劇『The Hot L Baltimore』（1976）をテレビ映画用に翻案した時から始まった。その直後、彼女は自伝的小説を基にした長編映画『ペーパーミントソーダ』（1977）の脚本を書き上げ、監督デビューを果たす。この最初の映画で彼女は名声を得て、1977年にルイ・デュック賞を受賞。1968年の学生運動を舞台にしたもう一つの自伝的作品である『Cocktail Molotov』（1980）へと続く。

さらにキュリスは彼女の最も有名で成功した映画である『女ともだち』（1983）の脚本と監督を務めた。ミュウミュウとイザベル・ユペールが演じた二人の女性の親密な関係を描いた戦時ドラマはフランス国内外で人気を博し、アカデミー賞外国語映画賞とセザール賞（4部門）にノミネートされた。そして第40回カンヌ国際映画祭のオープニングを飾った英語作品デビュー作『ア・マン・イン・ラブ』（1987）を手掛ける。この映画はキュリスの自伝的要素をほとんど排除した

RIPPLE V

最初の作品である。その後キュリスは自伝的三部作を『セ・ラ・ヴィ』（1990）で締めくくった。監督自身の両親の別居のつらい記憶を基にしたドラマである。

1991年息子ヤチャ・キュリスをもうける。ヤチャは後にサーシャ・スパーリングという名前で作家として活動している。この頃キュリスはパリでの生活の中でインスピレーションを得た作品を続けて発表した。イザベル・ユペール演じる30代の女流作家と、二人の愛人との関係を描く恋愛ドラマ『愛のあとに』（1992）とアンヌ・パリローとベアトリス・ダル演じる愛憎激しい“姉妹”の同居生活をスリリングに描いたラブ・サスペンス『彼女たちの関係』（1994）である。キュリス監督の次の作品『年下のひと』（1999）は、波瀾万丈な恋愛をテーマにジュリエット・ビノシュとブノワ・マジメルが主演する豪華な時代劇で、19世紀フランスの偉大な作家 ジョルジュ・サンドとアルフレッド・ド・ミュッセの情事を描いた。

2000年代に入って発表した2本の作品は三角関係を描いたロマンティック・コメディ『ソフィー・マルソーの愛人〈ラマン〉』（2003）とランベール・ウィルソン演じるテレビ・プロデューサーが昔の仲間との再会を描く、彼女の10作目の映画『L'anniversaire』（2005）で、キュリスはより軽いジャンルへの転向を試みた。作家フランソワーズ・サガンの生涯を描いた作品『サガン』（2008）では伝記映画に挑戦、シルヴィ・テステューが見事に演じた。テステューは監督の次の2作品『Pour une femme』（2013）と自身の著書の映画化『Arrête ton cinéma!』（2015）にも出演している。『Pour une femme』は2012年夏にリヨンで撮影され、ブノワ・マジメルとメラニー・ティエリーが主演を務めた。この映画は、夫の視点から不倫を描いたもので、妻の視点から描いた以前の映画『女ともだち』の姉妹作となっている。この映画は、2014年のCOLCOA フランス映画祭で観客特別賞を受賞した。最新作は息子サーシャ・スパーリングが脚本を手がけたファニー・アルダン主演の『Ma mère est folle』（2018）。

###

RIPPLE V

ディアーヌ・キュリス監督 フィルモグラフィ

製作年	原題	タイトル		主演	
1977	Diabolo menthe	ペパーミントソーダ		エレオノール・クラウウィン	オディール・ミシェル
1980	Cocktail Molotov		日本未公開	エリーズ・キャロン	フィリップ・ルバ
1983	Coup de foudre	女ともだち		ミュウ=ミュウ	イザベル・ユベール
1987	A man in love	ア・マン・イン・ラブ		ピーター・コヨーテ	グレッタ・スカッキ
1990	La Baule-les-Pins	セ・ラ・ヴィ		ナタリー・バイ	リシャル・ベリ
1992	Après l'amour	愛のあとに		イザベル・ユベール	ベルナル・ジロドー
1994	À la folie	彼女たちの関係		ベアトリス・ダル	アンヌ・バリロー
1999	Les enfants du siècle	年下のひと		ジュリエット・ピノシュ	ブノワ・マジメル
2003	Je reste!	ソフィー・マルソーの愛人 (ラマン)	劇場未公開	ソフィー・マルソー	ヴァンサン・ペレーズ
2005	L'anniversaire		日本未公開	ランベール・ウィルソン	ミシェル・ラロック
2008	Sagan	サガン-恋しみよ こんにちは-		シルヴィー・テストュー	ピエール・バルマード
2013	Pour une femme		日本未公開	ブノワ・マジメル	メラニー・ティエリー
2016	Arrête ton cinéma!		日本未公開	シルヴィー・テストュー	ジョージアヌ・バラスコ
2018	Ma mère est folle		日本未公開	ファニー・アルダン	ヴィアネ

スタッフ&キャスト

■スタッフ

監督・脚本・・・ディアーヌ・キュリス

製作・・・セルジュ・ラスキ

撮影・・・フィリップ・ルースロ

音楽・・・イヴ・シモン

編集・・・ジョエル・ヴァン・エフェンテール

■キャスト

アンヌ・・・エレオノール・クラウウィン

フレデリック・・・オディール・ミシェル

母・・・アヌーク・フェルジャック

パスカル・・・コリンヌ・ダクラ

ペリーヌ・・・コラリー・クレモン